

## みまさかの高校演劇と津山文化センター

高校演劇の世界は、全国的に戦前、戦後を通じて活発に活動を展開していました。

津山においても例外ではなく、終戦後もすぐに学校演劇は再開されました。そこには、演劇に情熱を傾ける熱心な指導者の存在があります。

その中の一人に河野磐先生（故人）がいます。河野先生は津山市勝間田町出身、国立京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）を卒業後、昭和17年から美作高女（現・美作高校）勤務、演劇部顧問として活躍されました。

河野先生は昭和26年に上京して、フリー・デザイナーとして名を馳せ、その後ヨーロッパ各国をスケッチ旅行されています。そして、昭和43年美作大学開学と同時に教授として招かれ、早速、演劇同好会を立ち上げられました。津山文化センターがその拠点となったのはいうまでもありません。

河野先生の功績は演劇活動のみにとどまらず、映画鑑賞会やコンサートを企画。自ら手書きでポスターを作成されました。このように、戦後の津山の文化を彩った功績は計り知れません。

さて、話を高校演劇に戻します。昭和24年、河野先生の尽力により、高校演劇は、男女合同公演を敢行、演目はチェーフホフ作「桜の園」。会場は美作高校講堂でした。

津山文化センターができるまでは公演の会場確保には苦心したようです。昭和30年代、高校演劇の会場は主に津山市立南小学校の講堂が使われました。

待望の津山文化センターが昭和41年、開館します。しかし、開館当時は、その輝くばかりの威容に、気後れするのか、津山文化センターの舞台に立つのは、「実現不可能だ」「冗談だ」「恥をかくだけだ」。とても敷居の高い存在だったようです。

それでも「憧れの舞台に立ちたい」。そんな気持ちが結晶となり、ついに第5回津山市内合同演劇発表会の新しい会場として、津山文化センターの名前が歴史に刻まれます。（昭和43年6月23日）

当時の高校生の回想記が残っていますので紹介しましょう。「発表会が近づいてくると、だんだん青ざめてきた。何人お客さんが観に来てくださるか。（津山）文化センターで恥をかくだけだ。みんながなりふり構わず走り回った。商店街でチラシを配り回ったり、友だちに頼み込んだり…。当日、幕の間からのぞき見て腰を抜かした。1,000人をこえるお客さん。いよいよ最後の幕切れ。拍手は続いた。拍手が3階席からも聞こえてきた。」

以来、津山文化センターは高校演劇の拠点となります。また、津山市教育委員会の音頭で美作地域の青年団、高校の文化活動活性化を図る「美作芸能祭」（演劇フェス



▲津山東高校は「まゆみのマーチ」で全国大会へ出場

ティバルの前身）も始まりました（昭和45年11月）。これにより、美作地区すべての高校が津山文化センターに集まって発表会を実施することができるようになりました。

演劇環境が整うに連れ、各校とも作品内容も充実し、大きな表彰を受けたり、県大会や中国地区大会へ度々駒を進めるようになりました。

平成の時代に入って、美作地区の高校演劇は、ますます隆盛を極めます。参加校はずっと一ケタでしたが、平成10年、初めて二ケタ参加になります。

レベルアップのための講習会や演劇教室も回数を重ねました。平成4年から発足した、津山文化振興財団が主催するステージ・ラボ（舞台照明・舞台音響の講習会）と演劇教室がコラボして、舞台技術も向上させました。（平成6～8年）

このようなバックボーンに支えられて、平成19年、ついに県北から全国大会出場校を輩出しました。

作陽高校作品「シャドー・ボクシング」（平成19年）、津山東高校作品「まゆみのマーチ」（平成22年）。

一口に全国大会と言っても、これは相当高いハードルです。地区大会、県大会、中国地区大会と勝ち抜き、全国へ出場できるのは中国ブロックからわずか1校に限られます。

さて、平成16年、勝央文化ホール（670席）が開館します。これを機に、高校演劇の拠点は徐々に津山文化センターから勝央文化ホールへと移行します。

これは少子化により、学校統合や演劇部の休部が相次ぎ、高校演劇の規模が縮小したことも原因の一つとなっています。

これからは、出演団体も増えて、以前のように演劇に関わる人たちの実践の場としてのミッションを果たせるセンターを目指していきたいと思っています。（終）

<参考文献：岡山県美作地区高等学校演劇協議会刊「みまさかの高校演劇」>